

日本物理学会誌 Vol.65 No.4 に、榎田敦氏の『原因は気温高, CO₂ 濃度増は結果』が1年以上遅れて掲載された。同時に独立行政法人産業技術総合研究所の阿部修治氏の『地球温暖化の科学—遅れてきた懐疑論の虚妄と罪』が同時掲載された。

一昨年秋に、日本物理学会編集委員会からの要請を受けて、榎田は日本気象学会誌『天気』に投稿した論文『CO₂ 濃度の増加は自然現象 榎田敦／近藤邦明 (気象学会誌「天気」投稿論文 2008/04/25)』の紹介論文である前掲の論文を提出した。しかし、日本物理学会誌編集委員会はその後、榎田の紹介論文の単独掲載を認めず、(独)産総研の阿部によるカウンター論文との同時掲載に固執した結果、榎田論文の掲載は1年以上も遅れることになった。

今回、日本物理学会誌に掲載された阿部論文を読んで、啞然とした。阿部の『論文』は昨年末に明らかになった IPCC の基礎データとなった観測データに対する改竄(通称 Climategate 事件)、これに基づいて構築された IPCC による人為的 CO₂ 地球温暖化仮説を妄信した上、何の証拠も示さずに榎田論文の内容を誤解(曲解?)した上の彼の思い込みによって、『これら「通俗的懐疑論者」の中でも特に「科学者」の肩書きを使い「科学」の装いを凝らした主張を展開している者たちは、一般の人々の科学者への信頼と敬意を悪用しているだけに、むしろ罪は重いと言わねばならない。「物理学者」の肩書きで数年前から「大気中の二酸化炭素(CO₂)濃度上昇は人為的な排出が原因ではない」というとんでもない主張を行っている榎田敦氏もその一人である。』という事実に基づかない感情的な言質によるレッテルを貼り付けることによって、人格攻撃を行う、自然科学の学術誌である日本物理学会誌の品格を貶めるようなものであったことは非常に遺憾である。

このような学術的にまったく意味の無い阿部論文を掲載するために榎田論文の掲載を1年以上も遅延させた日本物理学会の意図は何だったのであろうか?あるいは、このような阿部の論文を採用してまで榎田論文を貶めようとするのが日本物理学会の中核の意図なのであろうか?もしそうであるならば、日本物理学会誌編集委員会の査読制度とは最早本来の機能を果たしておらず、思想統制の道具になったのかもしれない。

ここでは阿部論文を読んだ方々の論評を紹介する。

●阿部論文を考察する

-
1. 日本物理学会誌 Vol.65 No.4 lancet2
 2. 物理学会誌に掲載された阿部論文を読んだ感想 中本正一郎(国立沖縄高専)
 3. 気象予報士会のメーリングリスト ある気象予報士の投稿
 4. 阿部論文を読んだ感想 シバさん
-

近藤さん、管理人さん、こんにちは。阿部修治氏の「地球温暖化の科学一遅れて来た懐疑論の虚妄と罪」を読みました。

まず驚いたのは、

「『温暖化はまだ何もわかっていない』とか『そもそもそういう問題は存在しない』といった言説を、科学の舞台ではなく、大衆向けの出版物やインターネットで流す人たちが今でもいる。(中略)でも特に『科学者』の肩書きを使い『科学』の装いを凝らした主張を展開している者たちは、一般の人々の科学者への信頼と敬意を悪用しているだけに、むしろ罪は重いと言わねばならない。」

のくだけりです。つまり人為的温暖化説に異を唱える者は罪人であると断じています。驚きました。阿部氏はある種のイデオロギーに染まった人間であると理解しました。科学論争を期待していた者としてはこの時点でガックリです。

以後、CO₂の循環について定性的な議論が続きますが置いておくとして、榎田氏に対する批判の箇所、

簡単に言えば、人為的に大気中に放出された CO₂ は毎年 30%吸収され、短期間に指数関数的に減少するので、大気中に残る人為的 CO₂ はわずかであるというのである。(中略)しかし、何度も言うように、大気と海・陸の間で CO₂ は循環しているのであって、一方的に吸収だけが進行しているわけではない。

榎田氏が CO₂の吸収のみを問題にし、放出を無視しているとの反論ですが、これは正しくないと思います。榎田氏は CO₂の放出と吸収を考慮した結果、大気中の平均滞留時間が 3.3 年であることを根拠に、CO₂増加量が人間起源だけでは説明できないと主張していたはずですが。別に CO₂が循環していることを無視しているわけではなく、残念ながら阿部氏の反論は反論になっていないようです。

榎田氏はさらに常軌を逸した理屈を繰り出す。「現在の気温の平均は陸海と CO₂ の出入りのない基準温度よりも 0.3°C程度高温の状態にあり、陸海から CO₂が放出され続けていると推論できる」というのである。しかし、その根拠となる科学的な事実は存在しないのだから、

榎田氏(と近藤さん)は、その論拠として気温偏差と大気中 CO₂濃度変化率の統計的な関係を論拠に「0.3°C程度高温の状態に」と述べているのであって、「根拠となる科学的な事実は存在しない」だの「サイエンスフィクション」などというのは言い過ぎだと思います。

榎田さんを始めとするいわゆる懐疑派も、人為的な CO₂ 放出は全く気候に影響しない、と主張しているのではなく、その影響は「自然変動と比較して相対的に小さいのではないか」と主張しているわけですから、両者の論争は「定量的」なものではなくてはならず、今回の阿部氏の反論のような「定性的」な議論は、単なるイデオロギー闘争にすぎないというのが一読者の率直な感想です。

物理学会誌に掲載されたこの阿倍論文では、阿部氏は汚い言葉を使って榎田氏を罵ります。

しかし、この阿部論文を読めば、
「我々納税者が税金で阿部氏を食わしていることがどれほど馬鹿げているか」
がわかります(注1)。

阿部修治氏は、納税者近藤邦明氏と榎田敦氏の行為(の成果)に非科学的で根拠の無い難癖をつけることにより、
「公務員が納税者民衆の名誉と(文化的に科学活動を行う権利)を傷つけた」
とわたしは言わざるを得ません。

阿部修治氏の論文が非科学的で根拠がない理由を以下にまとめました。私は阿部修治氏の産業技術総合研究所における職務と公務員としての任務を知りませんが、今は阿部氏が研究を任務とする官僚公務員であると仮定して議論を進めます。)

1. 阿倍論文は現象論的記述(いわゆる炭素循環量を図示して記述したもの、CO₂貯蔵量と流量の図)の段階からCO₂移動を表現する実体的な模型を頭の中に構築する段階に至っていない。⇒
「阿部氏の頭の中には現象の科学的理解が無い」と言えます。

2. 「気温が変化しないという理由により、CO₂が増加するという結果がもたらされた」という因果関係はありえない」という阿部氏の回りくどい日本語で、阿倍氏の思いつき(希かな望み)を堂々と告白しているだけです(注2)。
⇒阿部氏の単なる思いつきにすぎない着想を、阿倍氏は実際の観測データを用いて証明するという科学研究者の礼儀を阿倍氏は尊重していません。

3. 近藤榎田のデータ解析による

$$\Delta \text{CO}_2 = (\text{比例定数}) * (\text{気温}) + \text{定数}$$

を阿倍氏は理解していません。

近藤榎田の仕事の最大の功績は
「データ解析により大気中での二酸化炭素が大気中に蓄積する速度が気温に比例すること」
を発見したことです。

「観測された気温上昇の原因は何か？」
「海の中の生物化学過程が原因なのか？」
「地下からのメタンガスによる気温上昇が原因なのか？」

阿倍氏は「近藤槌田論文の中に書かれている海の中の生物化学過程は確認されていない」と言って、阿部氏は近藤槌田論文に難癖をつけていますが、このことは却って近藤槌田のデータ解析にたいして阿部氏がぐうの音も出ないほど完敗したことを示しています。

過去 100 年間の地球の平均気温が上昇したことのメカニズムがいまだに未解決であるのは、われわれが税金で養っている研究官僚が彼らの職務を怠ったからであって、それを近藤槌田のせいにするのは、税金泥棒が居直りをしているのと同じです。

近藤槌田論文は研究官僚が嘘をついて税金を食いものにしていることを、(研究官僚のように納税者が納入する税金を1円も使わないで)自分の時間と自分の金を使って、観測データを厳密に解析することによって告発したと言えるのです。

注1:阿倍氏は産業経済省直下の産業技術総合研究所に所属する研究官僚公務員です。

注2:阿倍氏は廻りくどい表現をして、読者を煙に巻くのですが、この文章は実は「気温が変化せずに CO₂が増加することはあり得ない。つまり、地球の気温がどれほどに高温であっても、気温が一定でありさえすれば海や陸域から大気中に二酸化炭素は流入しない」と阿倍氏は言っていることになります。したがって、阿倍氏が嘘を付いていることが分かります。

産業技術総合研究所に所属する研究官僚は公務員です。

我々が納税する税金で理学博士阿倍修治を我々が養っているのすから、「嘘をついて納税者を騙している公務員は、公務から追放されるべきではないか？」と私は思います。

気象予報士会のメーリングリスト(2010/04/14)

ある気象予報士の投稿

ご存知の方もおられるかと思いますが、**さんご紹介の文章がインターネット上でも読めるようなのでお知らせします。下の近藤邦明氏の HP から槌田、阿部ともに pdf ファイルでダウンロードできます。

<http://env01.cool.ne.jp/index02.htm>

個人的にはあまりおすすめできませんが、興味のある方はご覧ください。

阿部修治とかいう輩は「ここに科学的論争はない。あえて言えば科学と虚妄の対立である。」と冒頭に述べています。その言葉どおり、内容は科学論争ではなく単に相手をののしっているだけです。おまけにその根拠というのが「地に落ちた」(Wedge4月号)IPCCの権威への妄信ですので話になりません。個人的には読む価値はないと思います。(私も最初の1,2ページで読むのをやめました。)産業技術総合研究所というのはメールアドレスから推察すると政府機関のようですが、こんな連中に私の税金から給料が支払われているかと思うと、情けない限りです。次の仕分けでは廃止になるよう願っております。

阿部論文には驚きました。科学論文であそこまで感情的・侮蔑的な言葉を並べるとは。樋田さんも「社会は大きなウソに支配されている」等述べていますが、阿部氏の方は完全に個人攻撃、かつ、反論も不十分であり印象操作の感が強いです。

まあ、阿部氏本人があのように書くのは仕方ないとしても、それ以上に、それを改めさせることなく掲載した物理学会に愕然とします。これじゃネットの掲示板と変わりません。編集委員会は文章表現には介入せず、ノーガードの打ち合い OK という姿勢なら、読者としてはそれはそれでかまわないし、今回学会はそういう姿勢であることが伝わってきました。もっとも、樋田さんが阿部氏のように個人攻撃っぽく書いていたら掲載されなかったでしょうけど。(笑)

日本物理学界は、『それら(樋田、阿部)の主張に対して敢えて否定・肯定の判断をするものではない』と書かれてあります。

しかし、これはどうかなあ。別に「学会としては阿部氏の主張を支持する」と公言してもいいと思います。むしろ、現状の世界の流れとしては、「支持する」と公言しない方がおかしいくらいです。少なくとも「学会としては樋田理論には疑問を持っている」くらいのことを言ってもかまわないと思います。

ただ大事なことは常に反論を掲載するという姿勢。それもカウンター論文などという形ではなく。

今回学会が否定・肯定の判断を保留したのは、単に中立を装ったのではなく、クライメート事件が多少なりともからんでいるんじゃないかと想像されます。

で、阿部氏の論文は全体的には目新しいものは感じられません。

また、樋田論文では『C14 同位体比率は温暖化による減少と化石燃料の燃焼による減少とを区別できない』と述べられていますが、これに対する阿部氏の反論は見当たらないようです。樋田論文を読んでいないせいでしょうか。これも同時掲載の問題点のようです。

同位体 C13、C14 の比率から古代の気候が推定できるみたいですが、私の印象では樋田理論の「気温が先で CO₂ が後」は、古代の気候を説明するのにもわりとしくり当てはまり、逆に CO₂ 温暖化説は無理が多いと感じます。